

資治通鑑 第 185 卷

【唐紀一】 起著雍攝提格正月，盡七月，不滿一年。

■唐、●隋、**突厥**突厥統国訳漢文大成 經子史部 第 11 卷 009p

高祖神堯大聖光孝皇帝上之上武德元年（戊寅，618年）

【唐は長安を固め、東都は混乱】

■ **唐王に劍履上殿** 春，正月，丁未（43-43+1=1日）朔，隋の恭帝は唐王に詔して劍履して殿に上り，贊拜して名いわざらしむ。唐王は既に長安に克ち，書を以て諸郡縣に諭し，是に於いて東は商洛（陝西省漢中道商縣、現・商洛市商州区）より，南は巴、蜀を盡くし，郡縣の長吏及び盜賊の渠帥、氏羌の酋長は，争いて子弟を遣わして入見して降を請い，有司は復書すること，日に百を以て數える。（11-010p）

● **王世充と李密の再度激突** 王世充は既に東都の兵を得，進みて李密を洛北に撃ち，之を敗り，遂に鞏北（鞏県北部、現・河南省鄭州市鞏義市）に屯す。辛酉（57-43+1=15日），世充は諸軍に命じて各々浮橋を造りて洛を渡り密を撃ち，橋先ず成る者は先ず進み，前後一ならず。虎賁郎將の王辯は密の外柵を破り，密の營中は驚擾し，將に潰えんとす。世充は知らず，角を鳴らして衆を收め，密は因りて敢死の士を帥いて之に乗じ，世充は大敗し，橋を争いて溺死する者は萬餘人。王辯は死し，世充は僅に自ら免れ，洛北の諸軍は皆な潰える。世充は敢えて東都に入らず，北に河陽に趣く。是の夜，疾風寒雨し，軍士は水を涉りて沾濕し，道路の凍死する者も又た萬を以て數える。世充は獨り數千人と河陽に至り，自ら獄に繋ぎ罪を請い，越王の侗は遣使して之を赦し，召して東都に還らしめ，金帛、美女を賜い以て其の意を安んず。世充は亡散を收合し，萬餘人を得，含嘉城（都城の北、旧唐書王世充傳では含嘉倉城）に屯し，敢えて復た出でず。

● **李密は東都の金墉城を占領** 密は勝ちに乗りて金墉城に據り，其の門堞、廬舎を修め而して之に居り，鉦鼓之聲は，東都に聞こゆ。未だ幾もなくして，兵三十餘萬を擁し，北邙に陳し，南に上春門に逼る。乙丑（1+60-43+1=19日），金紫光祿大夫の段達、民部尚書の韋津は兵を出して之を拒む。達は密の兵の盛んなるを望見し，懼れ而して先ず還る。密は兵を縦ちて之に乗り，軍は遂に潰え，韋津は死す。是に於いて偃師、柏谷及び河陽の都尉の獨孤武都、檢校の河内郡丞の柳燮、職方郎（隋の制、兵部尚書に属す）の柳績等は各々所部を擧げて密に降る。竇建德、朱粲、孟海公、徐圓朗等は並びて遣使して表を奉りて勸進し，密の官屬の裴仁基等は亦た上表して位號を正すを請い，密は曰く、
「東都は未だ平らがず，此を議す可からず。」

■ **唐は東都救援軍派遣** 戊辰（4+60-43+1=22日），唐王は世子の建成を以て左元帥と為し，秦公の世民を右元帥と為し，諸軍十餘萬人を督して東都を救わしむ。

● **食料確保の売官** 東都は食乏しく，太府卿の元文都等は城を守りて公糧を食わざる者を募りて散官二品を進め，是に於いて商賈の象（象笏、西魏以来五品以上は通じて象牙を用いる）を執り而して朝する者は，勝げて數える可からず。

■ **唐は南陽方面へも進出** 二月，己卯（15-12+1=4日），唐王は太常卿の鄭元璹を遣わして兵を將いて商洛を出で，南陽（鄆州を改める）に徇え，左領軍府の司馬の安陸（安州を改める）の馬元規をして安陸及び荊（南郡）、襄（襄陽郡）を徇えしむ。

● **李密は東方を招慰** 李密は房彦藻、鄭頊等を遣わして東に黎陽に出で，道を分けて州縣を招慰せし

む。梁郡（宋州を改める）太守の楊汪を以て上柱國、宋州總管と為し、又た手書を以て之に與えて曰く、
「昔雍丘に在りて（183 卷大業十二年にあり）、曾て相い追捕す、鉤を射（管仲は齊の桓公を射て帶鉤に中てる、桓公は之を用いて以て相とする）、袂を斬る（晋の寺人披は公子重耳を伐ち、其の袂を斬る。文公は怨みず）こと、敢えて庶幾せざらんや。」
汪は遣使し往來して意を通ぜしむ、密も亦た羈縻して之を待つ。彦藻は書を以て竇建徳を招き、來たりて密に見え使む。建徳は復書し、辭を卑しくし禮を厚くして、托するに羅藝が南侵するを以て、(11-011p)北垂を捍御せんと請う。彦藻は還り、衛州（隋は汲郡と為す、河南省河北道汲県、現・新郷市衛輝市）に至り、賊帥の王德仁は之を邀殺す。德仁は衆數萬有り、林慮山（魏郡林慮県にあり、河南省河北道林県、現・安陽市林州市）に據り、四出して抄掠し、數州之患いを為す。

■三月、己酉（45-43+1=4日）、齊公の元吉を以て鎮北將軍、太原道行軍元帥と為し、十五郡諸軍事を都督せしめ、便宜を以て事に従うを聽す。

【煬帝は江都以て頽廢の極致】

● 煬帝は江都以て荒淫して安ぜず 隋の煬帝は江都に至り（大業十二年）、荒淫益々甚だしく、宮中に百餘房を為り、各々供張を盛んにして、實つるに美人を以てし、日々に一房をして主人と為さ令む。江都の郡丞の趙元楷は酒饌を供するを掌り、帝は蕭后及び幸姫と歴就して宴飲し、酒卮は口を離さず、從姫は千餘人亦た常に酔う。然れども帝は天下の危亂を見、意は亦た擾擾として自ら安んぜず、朝を退き則ち幅巾短衣し、杖を策きて歩游し、遍く台館を歴、夜に非ざれば止めず、汲汲として景を顧み、唯だ足らざるを恐れる。

● 煬帝は江東の丹楊遷都を望む 帝は自ら占候卜相を曉り、好みて吳語を為す。常（統は嘗）に夜置酒し、天文を仰視し、蕭后に謂って曰く、

「外間大いに人有りて儂を圖り、然れども儂は長城公（陳叔寶）と為るを失わず、卿は沈后（陳叔寶の后妃の沈氏）と為るを失わず、且く共に楽しんで飲む耳！」

因りて滿を引いて沉醉す。又た嘗て鏡を引きて自ら照し、顧みて蕭后に謂って曰く、

「好頭頸、誰か當に之を斫らんや？」

后は驚きて故を問ひ、帝は笑いて曰く、

「貴賤苦樂、更迭して之を為す、亦た復た何ぞ傷まん！」

帝は中原の已に亂れるを見、北に歸るの心無く、丹楊（帝は蔣州を丹楊郡と為す、蓋し建康に都せんとす）に都し、江東に保據せんと欲し、群臣に命じて之を廷議せしむ。内史侍郎の虞世基等は皆な以て善しと為す。右候衛大將軍の李才は極めて不可と陳じ、

「請う車駕は長安に還るべし」

と、世基と忿争し而して出ず。門下録事（隋の制では門下省に録事通事令史各々六人を置く）の衡水（信都郡に属す、本は漢の桃県。開皇十六年に信都の北界、武邑の西界、下博の南界を分けて置く。直隸省大名道衡水県、現・河北省衡水市桃城区）の李桐客は曰く、

「江東卑濕にして、土地は險狹なり、内に萬乘を奉じ、外に三軍を給せば、民は命に堪えず、恐らくは亦た將（統は終）に散亂する耳。」

御史は桐客が朝政を謗毀すると劾す。是に於いて公卿は皆な意に阿ねりて言う、

「江東之民は幸を望むこと已に久しく、陛下は江を過ぎ、撫し而して之に臨めば、此れ大禹（禹は南に巡狩して諸侯を會稽に會す）之事也。」

乃ち命じて丹楊宮を治せしめ、將に徙りて之を都せんとす。

● [逃亡相次ぎ、皇后も煬帝に忠告せず] 時に江都の糧は盡き、從駕驍果は多く關中の人なり、久しく客として郷里を思い、帝が西する意無きを見、多く叛きて歸らんと謀る。郎將の竇賢は遂に所部を帥いて西に走り、帝は騎を遣わして追いて之を斬り、而るに亡げる者は猶ほ止まらず、帝は之を患う。虎賁郎將の扶風の司馬德戡は素より帝に寵有り、帝は驍果を領して東城に屯せしめ、德戡は善き所の虎賁郎將の元禮、直閣（煬帝の制では、左右監門府に直閣各々六人有り、正五品）の裴虔通と謀りて曰く、

「今驍果の人人は亡げんと欲し、我は之を言わんと欲するも、恐らくは事に先だちて誅を受けん。(11-012p) 言わざれば、後に於いて事發し、亦た族滅を免かれず、奈何せんや？ 又た聞く關内は淪沒し、李孝常（李淵、前卷前年にあり）は華陰を以て叛し、上は其の二弟を囚え、之を殺さんと欲す。我が輩の家屬は皆な西に在り、能く此の慮り無からん乎？」

二人は皆な懼れ、曰く、

「然らば即ち計は將に安くに出でんや？」

德戡は曰く、

「驍果が若し亡げれば、之と俱に去るに若ず。」

二人は皆な曰く、

「善し！」（隋初に門下省は城門・尚食・尚藥・符璽・御府・殿内等六局を統べ、各々直長あり。煬帝は城門・尚食・尚藥・御府等五局を持って殿内省に隸し、符璽監を改めて郎と為す。城門に校尉を置く。後また城門郎と為す、また司醫・醫佐等の官を置く）

因りて轉た相い招引し、内史舍人の元敏、虎牙郎將の趙行樞、鷹揚郎將の孟秉、符璽郎の李覆、牛方裕、直長の許弘仁、薛世良、城門郎の唐奉義、醫正（司醫）の張愷、勳侍（勳士×、三侍の一）の楊士覽等は皆な之と同じく謀り、日夜相い結びて約し、廣座に於いて明かに叛計を論じ、畏避する所無し。宮人有り蕭后に白して曰く、

「外間人人は反せんと欲す。」

后は曰く、

「汝が之を奏すに任す。」

宮人は帝に言い、帝は大いに怒り、以為らく宜（續は可）言する所に非ずと、之を斬る。其の後宮人は復た后に白し、后は曰く、

「天下の事は一朝にして此に至る、救う可き者無し、何ぞ之を言うを用いん！ 徒らに帝をして憂え令む耳！」

是より復た言う者無し。

● [宇文化及を盟主に逃亡の計] 趙行樞は將作少監の宇文智及と素より厚く、楊士覽は、智及之甥也、二人は謀を以て智及に告げ、智及は大いに喜ぶ。德戡等は三月望日を以て黨を結びて西に遁げるを期し、智及は曰く、

「主上は無道と雖も、威令は尚ほ行われる、卿等が亡げ去れば、正に竇賢の如く死を取る耳。今日は實に隋を喪ぼし、英雄は並び起ち、同心して叛する者は已に數萬人、因りて大事を行えば、此れ帝王之業也。」

德戡等は之を然りとす。行樞、薛世良は智及の兄の右屯衛將軍の許公の化及を以て主と為さんと請い、結約は既に定まり、乃ち化及に告げる。化及の性は驚怯にして、之を聞き、色を變じて汗を流し、既に而して之に従う。

【宇文化及は煬帝殺害、隋滅ぶ】

●【宇文化及のクーデター勃発】德戡は許弘仁、張愷をして備身府（煬帝は領左右府を改めて左右備身府とす）に入り、識る所の者に告げて云わ使む、

「陛下は驍果の叛かんと欲するを聞き、多く毒酒を醗し、享會に因りて、盡く之を鳩殺し、獨り南人と此に留まらんと欲す。」

驍果は皆な懼れ、轉た相い語を告げ、反謀は益々急なり。乙卯（51-43+1=9日）、德戡は悉く驍果の軍吏を召し、諭すに為す所を以てし、皆な曰く、

「唯だ將軍の命のままにすべし！」

是の日、風霾（土を雨らす、土曇り、土煙）晝昏し。晡後、德戡は御廄の馬を盗み、潜に兵刃を厲ぐ。是の夕、元禮、裴虔通は閣下に直し、専ら殿内を主る。唐奉義は城門を閉じるを主り、虔通と相い知り、諸門は皆な鍵を下さず。三更に至り、德戡は東城に於いて兵を集めて數萬人を得、火を擧げて城外と相い應じる。帝は火を望見し、且つ外の喧囂を聞き、何事かと問う。虔通は對えて曰く、

「草坊は失火し、外人は共に之を救う耳。」

時に内外は隔絶し、帝は以て然りと為す。智及は孟秉と（江都の）城外に於いて千餘人を集め、候衛（左右候衛は昼夜巡察す、故に之を脅かす）虎賁の馮普樂を劫して兵を佈き衢巷を分守せしむ。燕王の倓（元徳太子の子、代王侑の弟）は變有るを覺り、夜、芳林門の側の水竇を穿ち而して入り、玄武門に至り、（11-013p）詭りて奏して曰く、

「臣は猝かに風に中たり、命は俄頃（か）に懸る、請う面辭するを得るを。」

裴虔通等は以て聞せず、之を執囚す。丙辰（52-43+1=10日）、天未だ明けず、德戡は虔通に兵を授け、以て諸門の衛士に代わらしむ。虔通は門より數百騎を將いて成象殿に至り、宿衛する者は、

「賊有り。」

と傳呼す。虔通は乃ち還り、諸門を閉め、獨り東門を開き、殿内の宿衛の者を驅りて出さ令め、皆な仗を投げて而して走る。右屯衛將軍の獨孤盛は虔通に謂って曰く、

「何物の兵ぞや、形勢はただ異なり！」

虔通は曰く、

「事勢は已に然り、將軍の事に預らず。將軍は慎しんで動く毋れ！」

盛は大いに罵りて曰く、

「老賊、是れ何物の語ぞや！」

甲を被るに及ばず、左右十餘人と拒み戦い、亂兵の殺す所と為る。盛は、楷（179 卷文帝の仁壽二年にあり）之弟也。千牛（煬帝の制では千牛は十六人、千牛刀を執るを掌り、左右府に属領す）の獨孤開遠（獨孤后の兄の子）は殿内の兵數百人を帥いて玄武門に詣り、閣を叩いて請いて曰く、

「兵仗は尚ほ全くす、猶ほ賊を破るに堪える。陛下が若し出でて戦いに臨めば、人情は自ら定まる。然らざれば、禍いは今至らん矣！」

竟に應じる者無く、軍士は稍散じる。賊は開遠を執り、義とし而して之を釋す。是より先、帝は驍健の官奴數百人を選びて玄武門に置き、之を給使と謂い、以て非常に備え、待遇は優厚にして、宮人を以て之に賜うに至る。司宮（尚宮の職）の魏氏は帝の信ずる所と為り、化及等は之に結び内應を為さ使む。是の日、魏氏は詔を矯めて悉く給使が外に出るを聽す、倉猝之際、制するに（続による）一人の在る者無し。

●【賊はただ帰るを望むのみ】德戡等は兵を引いて玄武門より入り、帝は亂を聞き、服を易え西閣に逃げ

る。虔通は元禮と兵を進めて左閣を排し、魏氏は之をひらき、遂に永巷に入り、問う、
「陛下は安くに在るや？」

美人有りて出で、之を指す。校尉の令狐行達は刀を抜きて直進し、帝は窗扉に映じ行達に謂って曰く、
「汝は我を殺さんと欲する邪？」

對えて曰く、

「臣は敢てせず、但だ陛下を奉じて西に還らんと欲する耳。」

因りて帝を扶けて閣を下る。虔通は、本は帝が晉王と為る時の親信の左右也、帝は之を見、謂って曰く、
「卿は私の敵人に非ず乎！何を恨み而して反するや？」

對えて曰く、

「臣は敢えて反せず、但だ將士は歸るを思い、陛下を奉じて京師に還らんと欲する耳。」

帝は曰く、

「朕は方に歸らんと欲す、正に上江(夏口より上流)の米船が未だ至らざるが為なり、今汝と與に歸らん耳！」

虔通は因りて兵を勒して之を守る。

● [遂に煬帝を殺す] 旦に至り、孟秉は甲騎を以て化及を迎え、化及は戰慄して言う能わず、人の來たりて謁する之者有れば、但だ首を俯いて鞍に據りて罪過(世俗の謙謝の辭)と稱す。化及は城門(宮城の門)に至り、德載は迎え謁し、引きて朝堂に入れ、號して丞相と為る。裴虔通は帝に謂って曰く、
「百官は悉く朝堂に在り、陛下は須く親ら出でて慰勞すべし。」

其の從騎を進め、帝に逼りて之に乗らしむ。帝は其の鞍勒の弊れたるを嫌い、更に新しき者に易え、乃ち之に乗る。虔通は轡を執りて刀を挟みて宮門を出、賊徒は喜び噪いで地を動かす。化及は揚言して曰く、
「何ぞ此の物を持して出ざるを用いん、亟に還りて手を與え(魏齊の間に率この言有り。之に毒手を与えて之を殺す)よ。」

帝は問う、

「世基は何くに在るや？」(11-014p)

賊黨の馬文學は曰く、

「已に梟首すなり矣！」

是に於いて帝を引いて還りて寢殿に至り、虔通、德載等は白刃を抜いて侍立す。帝は歎じて曰く、
「我は何の罪ありて此に至るや？」

文學は曰く、

「陛下は宗廟を違棄し、巡遊して息まず、外に征討に勤め、内に奢淫を極め、丁壯をして矢刃に盡き、女弱をして溝壑に填ぜ使め、四民は業を喪い、盜賊は蜂起す。専ら佞諛に任じ、非を飾り諫めを拒む。何ぞ罪無きを謂うや！」

帝は曰く、

「我は實に百姓に負けり。爾ぞ輩に至りては、榮祿は兼ね極まり、何び乃ち是くの如し！今日之事は、孰か首と為る邪？」

德載は曰く、

「溥天同じく怨む、何ぞ一人に止まらんや！」

化及は又た封德彝をして帝の罪を數え使め、帝は曰く、

「卿は乃ち士人なり、何為れぞ亦た爾るや！」

德彝は赧然とし而して退く。帝の愛子の趙王の杲は、年は十二、帝の側に在り、號慟して已まず、虔通は之を斬り、血は御服に濺ぐ。賊は帝を弑せんと欲し、帝は曰く、

「天子の死は自ら法有り、何ぞ加えるに鋒刃を以てするを得るや！鳩酒を取り來たるべし！」

文學等は許さず、令狐行達をして帝を頓せ使め坐せ令む。帝は自ら練巾を解いて行達に授け、之を縊殺す。初め、帝は自ら必ず難に及ぶと知り、常に罍(瓶)を以て毒薬を貯えて自ら隨え、幸する所の諸姫に謂って曰く、

「若し賊至れば、汝の曹は當に先ず之を飲むべし、然る後に我は飲まん。」

亂に及びて、顧みて薬を求め、左右は皆な逃げ散り、竟に得る能わず。蕭后は宮人と漆床板を撤して小棺を為り、趙王の杲と同じく西院の流珠堂に殯す。

●**〔煬帝の一族、側近誅殺〕**帝は巡幸する毎に、常に蜀王の秀を以て自ら隨え、驍果營に囚える。化及は帝を弑し、秀を奉じて之を立てんと欲す、衆議は可からず、乃ち秀及び其の七男を殺す。又た齊王の暕及び其の二子並せて燕王の倓を殺し、隋氏の宗室、外戚、少長と無く皆な死す。唯だ秦王の浩(秦王浚の子)は素より智及と往來し、且つ計を以て之を全くす。齊王の暕は素より帝の愛を失い(181 卷大業四年に始まる)、恆に相い猜忌す。帝は亂を聞き、蕭后を顧みて曰く、

「阿孩(齊王の暕の小字)に非ざるを得ん邪？」

化及は人をして第に就きて暕を誅さ使め、暕は帝が之を收め使むと謂いて、曰く、

「詔使且く兒を緩めよ、兒は國家に負かず！」

賊は曳いて街中に至り、之を斬り、暕は竟に殺す者の誰為るかを知らず、父子は死に至るまで相い明かにせず。又た内史待郎の虞世基、御史大夫の裴蘊、左翊衛大將軍の來護兒、秘書監の袁充、右翊衛將軍の宇文協、千牛の宇文暉、梁公の蕭銍等及び其の子を殺す。銍は、琮(故の梁主)之弟の子也。

●**〔煬帝殺害直後の混乱〕**難の將に作らんとするや、江陽の長の張惠紹は馳せて裴蘊に告げ、惠紹と謀りて詔を矯め郭下の兵を發して化及等を收め、門を叩きて帝を援けんとす。議定まり、遣わして虞世基に報ぜしむ。世基は反を告げる者の實ならざるを疑い、抑え而して許さず。須臾にして、難は作り、蘊は歎じて曰く、

「謀は播郎(虞世基の字)に及び、竟に人の事を誤まれり！」

虞世基の宗人(宗人人×)の及(続は汲)は世基の子の符璽郎の熙に謂って曰く、

「事勢は已に然り、吾は將に卿を濟いて南に渡らんとす、同じく死すとも何の益あらん？」

熙は曰く、

「父を棄て君に背く、生を何の地に求めんや？(11-015p) 尊(汲)之懷に感じ、此より決(訣)せん矣！」

世基の弟の世南は世基を抱きて號泣し、身を以て(続は無し)代わらんと請い、化及は許さず。黃門侍郎の裴矩は必ず將に亂有らんとすと知り、廡役と雖も皆な之を厚遇し、又た策を建て驍果の為に婦を娶る。亂作るに及び、賊は皆な曰く、

「裴黃門之罪に非ず。」

既に而して化及は至り、矩は迎えて馬首に拜し、故に免かるるを得る。化及は蘇威が朝政に預らざるを以て、亦た之を免る。威は名位は素より重く、往きて化及に參す。化及は衆を集め而して之を見、曲きつがさに殊禮を加える。百官は悉く朝堂に詣りて賀し、給事郎の許善心は獨り至らず。許弘仁は馳せて之に告げて曰く、

「天子は已に崩ず、宇文將軍は政を攝し、闔朝の文武は咸な集まる。天道人事は自ら代終有り、何ぞ叔に

預り而して低回すること此くの若し？」

善心は怒り、肯えて行かず。弘仁は反り走りて馬に上り、泣き而して去る。化及は人を遣わして家に就きて擒えて朝堂に至らしめ、既に而して之を釋す。善心は舞蹈せず而して出で、化及は怒りて曰く、
「此の人は大いに氣に負う！」

覆た命じて擒え還り、之を殺す。其の母の範氏は、年は九十二、柩を撫でて哭せず、曰く、
「能く國難に死す、吾は子有り矣！」

因りて臥して食さず、十餘日而して卒す。唐王之關に入る也、張季珣(節に死すは前卷前年にあり)之弟の仲琰は上洛(陝西省漢中道商県、現・商洛市商州区)の令為り、吏民を帥いて拒み守り、部下は之を殺して以て降る。宇文化及之亂に、仲琰の弟の琮は千牛左右(隋の制では左右府に千牛左右・司射左右あり)為り、化及は之を殺し、兄弟三人は皆な國難に死し、時の人は之を愧じる。

● 【宇文化及は大丞相となり、秦王の浩を立てる】 化及は自ら大丞相と稱し、百揆を總べる。皇后令を以て秦王の浩を立てて帝と為し、別宮に居り、詔を發し敕書を畫せ令め而して已む、仍ほ兵を以て之を監守す。化及は弟の智及を以て左僕射と為し、士及を内史令と為し、裴矩を右僕射と為す。

■ 乙卯 (51-43+1=9日)、秦公の世民を徙して趙公と為す。

■ 【唐王は九錫殊禮を返却】 戊辰(4+60-43+1=22日)、隋の恭帝は詔して十郡を以て唐國に益し、仍ほ唐王を以て相國と為し、百揆を總べしめ、唐國は丞相以下の官を置き、又た九錫を加える。王は僚屬に謂つて曰く、

「此れ諂諛の者の為す所耳。孤は大政を乗り而して自ら寵錫を加えるは、可なる乎？必ず若し魏、晉之跡に循えば、彼は皆な繁文偽飾にして、天を欺き人を罔う。其の實を考ふるに五霸に及ばず、而して名を求めること三王に過ぎんと欲す、此れ孤が常に非笑する所にして、竊に亦た之を恥じる。」

或は曰く、

「歴代の行う所、亦た何ぞ廢す可けんや！」

王は曰く、

「堯、舜、湯、武は、各々其の時に因りて、取與道を異にし、皆な其の至誠を推し(続は欠如)以て天に應じ人に順い、未だ夏、商之未必ず唐、虞之禪りに效うを聞かざる也。若し少帝をして知る有らしめば、必ず肯えて為さず。若し其の知る無ければ、孤は自ら尊び而して飾讓するは、平生の素心の為さざる所也。」
但だ丞相を改めて相國府と為し、其の九錫殊禮は、皆な之を有司に歸す。

● 【宇文化及の帰途に沈光逆乱】 宇文化及は左武衛將軍の陳稜を以て江都太守と為し、留事を綜領せしむ。壬申 (8+60-43+1=26日)、内外に令して戒嚴せしめ、

「長安に還らんと欲す」

と雲う。皇后・六宮は皆な舊式に依りて御宮を為り、(11-016p) 營前に別に帳を立て、化及は事を其の中に視、仗衛部伍は、皆な乘輿に擬す。江都の人の舟楫を奪い、彭城(徐州)の水路を取りて西に歸る。折衝郎將(煬帝が置く、正四品。驍果を領するを掌る、領左右府に属す)の沈光が驍勇なるを以て、給使を將いて禁内(既に御營を立て、その中をいう)に營せ使む。行きて顯福宮に至り、虎賁郎將(煬帝の制、十二府に衛毎に護軍四人を置き、將軍に副式するを掌る。尋ぎて護軍を改めて虎賁郎將と為し、虎牙郎將を副と為す)の麥孟才、虎牙郎(虎牙郎將とすべし)の錢傑は光と謀りて曰く、

「吾が儕^{ともがら}は先帝の厚恩を受け、今首を俯^{うつむ}かせ仇に事え、其の驅帥を受ける、何の面目ありてか世間に視息せん哉！吾は必ず之を殺さんと欲す、死すとも恨む所無し！」

光は泣いて曰く、

「是れ將軍に望む所也！」

孟才は乃ち恩舊（旧恩ある者）を糾合し、將いる所の數千人を帥い、期するに晨に起きて將に發せんとする時化及を襲うを以てす。語は洩れ、化及は夜腹心と走りて營外に出、人を留めて司馬德戡等に告げ、之を討た使む。光は營内の喧^{けん}を聞き、事覺らるるを知り、即ち化及の營を襲い、空しく獲る所無く、内史侍郎の元敏^あに値い、數め而して之を斬る。德戡は兵を引いて入りて之を圍み、光を殺し、其の麾下の數百人は皆な斗死し、一も降る者無し。孟才も亦た死す。孟才は、鐵杖（度遼の役に死す）之子也。

● 【宇文化及討伐で沈法興挙兵】 武康の沈法興、世々郡の著姓と為り、宗族は數千家あり。法興は吳興太守と為り、宇文化及が弒逆するを聞き、挙兵し、化及を討つを以て名と為す。烏程（吳興郡を帯びる、時に沈法興は東陽の賊の樓世幹を討つ。義寧二年に江都乱れるや、沈法興は挙兵し三月東陽を發す）に至る比^{ころ}おい、精卒六萬を得、遂に餘杭、毘陵、丹楊を攻め、皆な之を下し、江表十郡に據る。自ら江南道大總管を稱し、製を承けて百官を置く。

■ 東國公の竇抗は、唐王之妃の兄也。煬帝は長城を靈武（煬帝は靈州を改める）に行^{めぐ}（循行）ら使む。唐王が關中を定めるを聞き、癸酉（9+60-43+1=2 7 日）、靈武、鹽川（煬帝は鹽州を改める）等數郡を帥いて來降す。

● 【官軍は稽胡を討つ】 夏、四月、稽胡（步落稽、匈奴の別種、離石以西、安定以東）は富平（京兆郡に属す）を寇し、將軍の王師仁は撃ちて之を破る。又た五萬餘人は宜春（宜君に作るべし、京兆郡に属す、現・陝西省銅川市宜君県）を寇し、相國府の咨議參軍の竇軌は兵を將いて之を討ち、黃欽山（水經注に、清水は雲陽県の石門山に出、東南流して黃欽山の西を巡ると）に戦う。稽胡は高きに乗じて火を縦ちて、官軍は小しく卻く。軌は其の部將十四人を斬り、隊中の小校を抜きて之を代らしめ、兵を勅して復た戦う。軌は自ら數百騎を將いて軍後に居り、之に令して曰く、

「鼓聲を聞き進まざる者有り、後ろより之を斬らん！」

既に而して之に鼓し、將士は先を争いて敵に赴き、稽胡は之を射て止むる能わず。遂に大いに之を破り、男女二萬口を虜とす。

■ 【李世民は李密勢を撃破】 世子の建成等は東都に至り、芒華苑に軍す。東都は閉門して出でず、人を遣わして招諭するも、應じず。李密は軍を出して之を争い、小さく戦い、各々引いて去る。城中は内應を為さんと欲する者多く、趙公の世民は曰く、

「吾は新たに關中を定めるも、根本は未だ固まらず、(11-017p) 懸軍は遠く來たりて、東都を得ると雖も、守る能わざる也。」

遂に受けず。戊寅（14-11+1=4 日）、軍を引いて還る。世民は曰く、

「城中は吾が退くを見、必ず來たりて追躡せん。」

乃ち三伏を三王陵（河南県の西南、柏亭の東北に在り、三王とは周の景王・悼王・定王か）に設け以て之を待つ。段達^だは果たして萬餘人を將いて之を追い、伏に遇い而して敗れる。世民は北^へげるを逐い、其の城下（東都）に抵り、四千餘級を斬る。遂に新安、宜陽の二郡を置き、行軍總管の史萬寶、盛彥師をして兵を將いて宜陽に鎮せ使め、呂紹宗、任瑰をして兵を將いて新安（北周は中州及び東垣県を置く。隋は開皇の初めに州を廢して県と為す。新安と皆、河南郡に属す、今並びに郡を置く、現・三門峡市義馬市）に鎮し而して還る。

突厥■ **[唐は調略で張長遜を説く]** 初め、五原（煬帝は豊州を改める、現・内モンゴル自治区バヤンノール市五原県）通守の櫟陽（京兆郡に属す県、旧萬年県、武徳元年に改名。現・西安市臨潼区）の**張長遜**は中原大亂するを以て、郡を擧げて突厥に付き、突厥は以て割利特勒と為す。**郝瑗**は**薛舉**を説く、

「**梁師都**及び突厥と兵を連らねて以て長安を取らん」

と、**舉**は之に従う。時に**啟民可汗**之子の**咄苾**は、**莫賀咄設**と號し、牙を建て五原之北に直たり、**舉**は遣使して**莫賀咄設**と入寇せんと謀り、**莫賀咄設**は之を許す。**唐王**は都水監（開皇の初めに都水台を立て使者を置く。大業中に都水監とす）の**宇文歆**をして**莫賀咄設**に賂し、且つ為に利害を陳べ、其の出兵を止め使め、又た**莫賀咄設**に説き**張長遜**を遣わして入朝せしめ、五原之地を以て之を中國に歸せしめ、**莫賀咄設**は並びて之に従う。己卯（15-11+1=5日）、武都（漢の郡、西魏は武州、煬帝は復た武都郡とす。現・隴南市武都区）、宕渠（漢の県、遼は渠州を置く、煬帝は改めて宕渠郡を置く、現・四川省達州市渠県）、五原等の郡は皆な降り、**王**は即ち**長遜**を以て五原太守と為す。**長遜**も又た詐りて詔書を為り**莫賀咄設**に與え、其の謀を知るを示す。**莫賀咄設**は乃ち**舉**、**師都**等を拒み、其の使いを納れず。

■ 戊戌（34-11+1=24日）、世子の**建成**等は長安に還る。

● **[李密は東都入場に失敗]** 東都の號令は四門を出でず、人は固志無く、朝議郎の**段世弘**等は西師（**李建成**の東征軍）に應ぜんと謀る。會々西師は已に還り、乃ち人を遣わして**李密**を招き、期するに己亥の夜を以て之を納れんとす。事は覺われ、**越王**は**王世充**に命じて討ちて之を誅せしむ。**密**は城中の已に定まるを聞き、乃ち還る。

● **[宇文化及は司馬德戡を肅正]** **宇文化及**は衆十餘萬を擁し、六宮を據有し、自ら奉養すること一に**煬帝**の如し。毎に帳中に於いて南面して坐し、人の事を白す者有れば、嘿然として對えず。下牙（諷者の類い）、方に啟狀を取り**唐奉義**、**牛方裕**、**薛世良**、**張愷**等と之を參決す。少主の**浩**を以て尚書省に付し、衛士十餘人をして之を守ら令め、令史（門下省に録事・通事令史各々六人あり）を遣わして其の畫敕を取らしめ、百官は復た朝參せず。彭城に至り、水路は通じず、復た民の車牛を奪いて二千兩を得、並びに宮人珍寶を載せる。其の戈甲戎器は、悉く軍士をして之を負わ令め、道は遠く疲劇し、軍士は始めて怨む。**司馬德戡**は竊に**趙行樞**に謂って曰く、

「君は大いに我を謬誤す！當今亂を撥うには、必ず英賢に藉る。**化及**は庸暗にして、群小は側に在り、事將に必ず敗れん、之を若何せん？」（**化及**を主と為すを建言）

行樞は曰く、

「我等に在る耳、（11-018p）之を廢すること何ぞ難からんや！」

初め、**化及**は既に政を得、**司馬德戡**に爵の溫國公を賜い、光祿大夫を加える。其の専ら驍果を統べるを以て、心は之を忌む。後數日にして、**化及**は諸將を署して士卒を分配し、**德戡**を以て禮部尚書と為し、外に美遷を示し、實は其の兵柄を奪う。**德戡**は是に由り憤怒し、獲る所の賞賜は、皆な以て**智及**に賂す。**智及**は之が為に言い、乃ち之をして後軍の萬餘人を將いて以て従わ使む。是に於いて**德戡**、**行樞**は諸將の**李本**、**尹正卿**、**宇文導師**等と後軍を以て襲いて**化及**を殺し、更に**德戡**を立てて主と為さんと謀る。人を遣わして**孟海公**（曹州に拠る）に詣らしめ、結び外助と為さんとす。遷延して未だ發せず、**海公**の報を待つ。**許弘仁**、**張愷**は之を知り、以て**化及**に告げる。**化及**は**宇文士及**を遣わして陽りて遊獵を為し、後軍に至り、**德戡**は事の露わるを知らず、營を出でて迎え謁し、因りて之を執る。**化及**は之を讓めて曰く、

「公とは力を戮せて共に海内を定め、萬死に出でる。今始めて事は成り、方に共に富貴を守らんと願うに、公は又た何ぞ反せん也？」

德載は曰く、

「本は昏主を殺すは、其の淫虐に苦しみてなり。推して足下を立てる、而るに又た之よりも甚だし。物情に逼られ、已むを獲ざる也。」

化及は之を縊殺し、並せて其の支黨十餘人を殺す。孟海公は化及之強きを畏れ、衆を帥いて牛酒を具えて之を迎える。李密は鞏洛（洛水は鞏に至りて黄河に入る、故に鞏水という）に據り以て化及を拒み、化及は西するを得ず、兵を引いて東郡に向かい、東郡通守の王軌は城を以て之に降る。

■ **[王君廓の二心、遂に唐王に降る]** 辛丑(37-11+1=27日)、李密の將の井陘（恒山郡に属す、現・河北省石家庄市井陘県）の王君廓は衆を帥いて來降す。君廓は本は群盜なり、衆數千人有り、賊帥の章寶、鄧豹と合わせて虞郷（山西省河東道虞郷県、現・運城市塩湖区解州鎮）に軍し、唐王と李密と俱に遣使して之を招く。寶、豹は唐王に従わんと欲し、君廓は偽りて之と同じくし、其の備え無きに乗り、襲撃し、之を破り、其の輜重を奪い、李密に奔る。密は之に禮せず、復た來降し、上柱國に拜し、河内太守に假す。

【蕭銑は江南に皇帝即位】

● **[蕭銑は梁皇帝に即位、諸勢力糾合]** 蕭銑は皇帝に即位し、百官を置き、梁室の故事に准じる。其の從父の琮に諡して孝靖皇帝と為し、祖の巖を河間の忠烈王と為し、父の璿を文憲王と為し、董景珍等の功臣七人を封じて皆な王と為す。宋王の楊道生を遣わして南郡（煬帝は荊州を改める）を撃たしめ、之を下し、都を江陵に徙し、園廟を修復す。岑文本を引いて中書侍郎と為し、文翰を典らしめ、委ねるに機密を以てす。又た魯王の張繡をして嶺南を徇えしめ、隋將の張鎮周、王仁壽等は之を拒む。既に而して煬帝の弑に遇うを聞き、皆な銑に降る。欽州（煬帝は欽州を改めて寧越郡と為す、現・広西壮族自治区欽州市欽南区）刺史の寧長真（文帝が刺使に命じる）も亦た鬱林（梁の定州、後に南定州。大業の初めに鬱州と為し継ぎて郡とす、現・広西壮族自治区貴港市桂平市）、始安（桂州を改める、現・江西省桂林市）之地を以て銑に附く。漢陽太守の馮盎（隋の仁壽の初めに潮成の叛獠を平らげ、漢陽の太守に拜す。隋滅び奔りて嶺表に還り諸郡を據有す）は蒼梧（梁は成州を置き、開皇の初めに封州。煬帝は郡と為す）、高涼（高州を改める、現・広東省陽江市陽春市）、珠崖（崖州を改める、現・海南省海口市瓊山区）、番禺（南海郡治、現・広東省広州市番禺区）之地を以て林士弘に附く。銑、士弘は各々人を遣わして交趾太守の丘和を招き、和は従わず。(11-019p) 銑は寧長真を遣わして嶺南の兵を帥いて海道より和を攻め、和は出でて之を迎えんと欲し、司法書佐（煬帝は郡の諸司參軍を書佐とす）の高士廉は和を説いて曰く、

「長真の兵數は多しと雖も、懸軍遠く至り、持久する能わず、城中の勝兵は以て之に當たるに足る、奈何して風を望みて制を人に受けるや！」

和は之に従い、士廉を以て軍司馬と為し、水陸諸軍を將いて逆撃し、之を破り、長真は僅に身を以て免れ、盡く其の衆を俘とす。既に而して驍果有り江都より至り、煬帝の凶問を得、亦た郡を以て銑に附く。士廉は、勸（北齊の清川王岳の子）之子也。

● **[蕭銑は始安郡丞の李襲志を降し江南に割拠]** 始安の郡丞の李襲志は、遷哲（170 卷太建二年にあり）之孫也、隋末に、家財を散じ、士を募りて三千人を得、以て郡城を保つ。蕭銑、林士弘、曹武徹は迭いに來たりて之を攻め、皆な克たず。煬帝の弑に遇うを聞き、吏民を帥いて臨すること三日。或は襲志に説いて曰く、

「公は中州の貴族（李襲志の先祖は隴西狄道の人、後に金州安康の人となる、門地高しとする）にして、久しく鄙郡に臨み、華、夷は悦服す。今隋室は主無し、海内は鼎沸し、公の威惠を以て、嶺表に號令すれば、尉佗之業（漢の

高帝紀にあり、趙佗の別名、南越の初代王。秦の元官僚)は坐して致す可き也。」

襲志は怒りて曰く、

「吾は世々忠貞を繼ぐ、今江都は覆ると雖も、宗社は尚ほ存し、尉佗は狂僭(狂妄僭越)なり、何ぞ慕うに足りん也！」

説者を斬らんと欲し、衆は乃ち敢えて言わず。堅守すること二年、外に聲援無く、城は陥ち、銑の虜とする所と為り、銑は以て工部尚書と為し、桂州總管を檢校せしむ。是に於いて東は九江(江州を改める、現・江西省九江市濰陽区)より、西は三峡に抵り、南は交趾に盡き、北は漢川(漢水以南の意味)を距て、銑は皆な之を有ち、勝兵は四十餘萬あり。

[李淵は唐の皇帝即位]

■ [李淵は煬帝の死に慟哭] 煬帝の凶問は長安に至り、唐王は之を哭し慟して、曰く、

「吾は北面して人に事え、道を失いて救う能わず、敢えて哀を忘れん乎！」

●五月、山南の撫慰使の馬元規は朱粲を冠軍(南陽郡に属す、現・南陽市鄧州市張村鎮冠軍村)に撃ち、之を破る。

●■王徳仁は既に房彦藻を殺し(上の二月にあり)、李密は徐世勳を遣わして之を討つ。徳仁の兵は敗れ、甲寅(50-41+1=10日)、武安(煬帝は州を郡と為す)通守の袁子幹と皆な(唐に)來降し、詔して徳仁を以て鄴郡(相州を改める。元の魏郡)太守と為す。

■ [唐王皇帝即位] 戊午(54-41+1=14日)、隋の恭帝は位を唐に禪り、遜りて代邸に居る。(隋は開皇元年以來三主38年で滅亡)甲子(60-41+1=20日)、唐王は皇帝に太極殿(隋の大興殿を改名)に即位し、刑部尚書の蕭造を遣わして天に南郊に告げしめ、大赦し、改元(武徳)す。郡を罷め、州を置き(大業二年に州を郡にす、本文の大業二年は×)、太守を以て刺史と為す。五運を推して土徳と為し、色は黄を尚ぶ。

● [東都で越王即位] 隋の煬帝の凶問は東都に至り、戊辰(4+60-41+1=24日)、留守官は越王(元徳太子昭の子の侗)を奉じて皇帝の位に即かしめ、大赦し、改元して皇泰とす。是の日朝堂に於いて宣旨し、時に金革に鐘るを以て、公私は皆な即日大祥す。大行を追諡して明皇帝と曰い、(11-020p)廟號を世祖とす。元徳太子を追尊して成皇帝と曰い、廟號を世宗とす。母の劉良娣を尊びて皇太后と為す。段達を以て納言(門下省に二人あり)、陳國公と為し、王世充を納言、鄭國公と為し、元文都を内史令(隋の制には内史省に監令各々一人を置く、つぎて監を廢して令二人を置く)、魯國公と為し、皇甫無逸を兵部尚書、杞國公と為し、又た盧楚を以て内史令と為し、郭文懿を内史侍郎と為し、趙長文を黃門侍郎と為し、共に朝政を掌り、時に人は「七貴」と號す。皇泰主は眉目畫くが如く、温厚仁愛にして、風格は儼然たり。

突厥■ [突厥は唐に横暴] 辛未(7+60-41+1=27日)、突厥の始畢可汗は骨咄祿特勒(突厥の官、子弟を特勒という)を遣わして來たらしめ、之を太極殿に宴し、九部の樂(杜佑曰く、武徳の初めに隋の旧制に因り九部の樂あり。宴樂・清商・西涼・扶南・高麗・龜茲・安國・疎勒・康國)を奏す。時に中國人の亂を避ける者は多く突厥に入り、突厥は強盛なり、東は契丹、室韋より、西は吐谷渾、高昌を盡くし、諸國は皆な之に臣たり、控弦は百餘萬。帝は初めて起こるに其の兵馬を資とするを以て、前後餉遺するは、勝げて紀す可からず。突厥は功を待みて驕倨なり、使者を遣わして長安に至る毎に、多く暴横なるも、帝は之を優容す。

■ [唐の律令改定と大学設置] 壬申(8+60-41+1=28日)、裴寂、劉文靜等に命じて律令を修定せしむ。國子、太學、四門生を置き、合わせて三百餘員、郡縣の學も亦た各々生員を置く。

■ [唐の支配体制] 六月、甲戌(10-10+1=1日)朔、趙公の世民を以て尚書令と為し、黃台公(県公、東魏は黃台県を潁川に置く、大業の初めに廢す)の瑗を刑部侍郎と為し、相國府の長史の裴寂を右僕射と為し、政事を

知せしめ、司馬の劉文靜を納言と為し、司録の竇威を内史令と為し、李綱を禮部尚書と為し、選事を參掌せしめ、掾の殷開山（殷嶠の字）を吏部侍郎と為し、屬の趙慈景を兵部侍郎と為し、韋義節を禮部侍郎と為し、主簿の陳叔達、博陵（煬帝は定州を改める）の崔民幹を並せて黃門侍郎と為し、唐儉を内史侍郎と為し、錄事參軍の裴晞を尚書右丞（統は左丞）と為す。隋の民部尚書の蕭瑀を以て内史令と為し、禮部尚書の竇璡を戸部尚書（貞觀 23 年に太宗の諱を避けて民部尚書を戸部尚書に改める。史家は後来の官名を記す）と為し、蔣公の屈突通を兵部尚書と為し、長安令の獨孤懷恩を工部尚書と為す。瑗は、上之從子。懷恩は、舅の子也。

■ **[裴寂・蕭瑀を信賴]** 上は裴寂を待つこと特に厚く、群臣は與に比を為す無く、賞賜服玩は、勝げて紀す可からず。尚書（尚食に作るべし、殿中省に尚食奉御二人あり）奉御に命じて日に御膳を以て寂に賜い、朝を視れば必ず引いて與に同坐し、閣に入りては則ち之を臥内に延く。言の従わざる無く、稱して裴監（隋に事えて晋陽の宮監たり、之を親しみて旧官を以て稱す）と為し而して名いわず。蕭瑀に委ねるに庶政を以てし、事は大小と無く、關掌せざるは莫し。瑀も亦た孜孜として力を盡くし、違えるを繩し過まてるを擧げ、人は皆な之を憚り、之を毀る者は衆けれども、終に自ら理せず。上は嘗て敕有り而して内史（隋唐では王の言は内史省に下り、皆宣署申覆して之を施行）は時に宣行せず、上は其の遲きを責め、瑀は對えて曰く、

「大業之世は、内史は敕を宣し、或は前後相い違ひ、有司は從う所を知らず、其の易きこと前に在り、
(11-021p) 其の難きこと後に在り。臣は省に在ること日久しく（隋において内史侍郎たり）、備に其の事を見る。今王業は經始し、事は安危に系り、遠方は疑ひ有れば、恐らくは機會を失わん、故に臣は一敕を受ける毎に必ず勘審し、前敕と違わざら使め、始めて敢えて宣行す。稽緩之愆^{あやま}ちは、實に此に由る。」
上は曰く、

「卿は心を用いること是くの如し、吾は復た何をか憂えんや！」

■ **[呂子臧は煬帝の喪に礼して投降]** 初め（この年二月派遣）、帝は馬元規を遣わして山南を慰撫せしめ、南陽の郡丞の河東の呂子臧は獨り郡に據りて従わず。元規は使い數輩を遣わして之を諭さしめ、皆な子臧の殺す所と為る。煬帝の弒に遇うに及び、子臧は喪を發して禮を成し、然る後に降を請う。鄧州（南陽郡を鄧州と為す。穰・新野・南陽・課陽・臨湍・冠軍・菊潭・順陽県。湖北省襄陽道襄陽県の北、現・南陽市鄧州市）刺史に拜し、南郡公に封じる。

■ 大業律令を廢し、新格を頒つ。

■ **[李淵は貴臣と親しむ]** 上は事を視る毎に、自ら名を稱し、貴臣を引いて榻を同じくし而して坐す。劉文靜は諫めて曰く、

「昔王導に言有り、(90 卷晋の元帝太興元年にあり、統は 40 卷とするは誤り)『若し太陽が俯して萬物に同じくすれば、群生をして何を以て照を仰が使めんや！』今貴賤は位を失うは、常久之道に非ず。」

上は曰く、

「昔漢の光武は嚴子陵と共に寝ね（後漢書嚴光傳にあり）、子陵は足を帝の腹に加える。今諸公は皆な名徳舊齒、平生の親友なり、宿昔之歡は、何ぞ忘れる可けん也。公は以て嫌と為す勿かれ！」

■ 戊寅（14-10+1=5 日）、隋の安陽（隋の安陽県、相州を帯びる。河南省河北道安陽県、現・安陽市安陽県）令の呂銀は相州を以て來降し、以て相州刺史と為す。

■ **[唐は先祖を祀る、親族を王に封じる]** 己卯（15-10+1=6 日）、四親の廟主を祔す。皇高祖の瀛州府君を追尊して宣簡公と曰う。皇曾祖の司空を懿王と曰う。皇祖の景王を景皇帝と曰い、廟號を太祖とし、祖妣を景烈皇后と曰う。皇考元王を元皇帝と曰い、廟號を世祖とし、妣の獨孤氏を元貞皇后と曰う。妃の竇氏を追諡して穆皇后と曰う。毎歲昊天上帝、皇地祇、神州地祇（神州・迎州・冀州・戎州・拾州・桂州・營州・咸州・

陽州の九州の祗)に、**景帝**を以て配し、**感生帝**(古は帝王の興るや、必ず五精の氣に感じて以て生ず。隋は火徳を以て王たり、赤熛怒を祀りて感帝と為す。唐は土徳を以て王たり、含樞紐を祀りて感帝と為す)、**明堂**は、**元帝**を以て配す。庚辰(16-10+1=7日)、世子の**建成**を立てて**皇太子**と為し、**趙公**の**世民**を秦王と為し、**齊公**の**元吉**を齊王と為し、宗室の**黃瓜公**の**白駒**(先に黃瓜県公に封じらる。黃瓜県は拓跋魏の置く所、上邦)を平原王と為し、**蜀公**の**孝基**を永安王と為し、柱國の**道玄**を淮陽王と為し、**長平公**の**叔良**を長平王と為し、**鄭公**の**神通**を永康王と為し、**安吉公**の**神符**を襄邑王と為し、柱國の**徳良**を新興王と為し、上柱國の**博又**を隴西王と為し、上柱國の**奉慈**を勃海王と為す。**孝基**、**叔良**、**神符**、**徳良**は帝之從父の弟、**博又**、**奉慈**は弟の子、**道玄**は從父の兄の子也。

■ **[李世民は薛舉討伐へ]** 癸未(19-10+1=20日)、**薛舉**は涇州(安定郡を涇州と為す。北魏は涇州を置き高平に治す、涇水に因りて名と為す。現・定西市安定区 or 固原市原州区)を寇す。秦王の**世民**を以て元帥と為し、八總管の兵を將いて以て之を拒ましむ。

■ **[唐の天下まだ定まらず]** 太僕卿の**宇文明達**を遣わして山東を招慰せしめ、永安王の**孝基**を以て陝州(義寧の初め河南の陝県を以て弘農郡と為す、今陝州と為す)總管と為す。時に天下は未だ定まらず、凡そ邊要之州は、皆な總管府を置き、(11-022p)以て數州之兵を統ぶ。

■ **[隋帝の親族も登用可能]** 乙酉(21-10+1=12日)、**隋帝**を奉じて鄜國公と為し。詔して曰く、「近世以來、時運は遷革し、前代の親族は、誅夷せざるは莫し。興亡之效は、豈に伊れ人力ならんや！其の隋の蔡王の**智積**等の子孫は、並びて所司に付し、才を量りて選用すべし。」

● **[李密と宇文化及の離間策]** 東都は**宇文化及**の西に來たるを聞き、上下は震懼す。**蓋琮**という者有り、上疏す、

「請う**李密**に説き之と勢いを合わせ**化及**を拒まん。

元文都は**盧楚**等に謂って曰く、

「今仇恥は未だ雪が^すず而して兵力は足らず、若し**密**の罪を赦し**化及**を撃た使めば、兩賊は自ら鬥い、吾は^{おもむろ}徐に其の弊を承けん。**化及**は既に破れ、**密**の兵も亦た疲れん。又た其の將士は吾が官賞を利とし、離間す可きこと易し、**密**を並せて亦た擒にす可き也。」

楚等は皆な以て然りと為し、即ち**琮**を以て通直散騎常侍と為し、敕書を繼して**密**に賜う。

■ 丙申(32-10+1=23日)、隋の**信都**(唐では冀州に入る)の郡丞の**東萊**(唐では萊州となる)の**麴稷**は來降し、冀州刺史を拜す。

■ **[孫伏伽の陛下への諫言]** 丁酉(33-10+1=24日)、**萬年縣**(周の明帝二年に長安を分けて萬年縣と無し、長安と並びて京城に居る。隋は大興縣に改め、唐はまた萬年に戻し、長安と並び赤縣とす。萬年縣は宜揚坊に治し朱雀街東54坊を領し、長安縣は長壽坊に治し、街西54坊を領す)の**法曹**(隋の煬帝は県尉を改めて県正とし、つぎて正を改めて戸曹・法曹と為す。孫伏伽の萬年法曹は隋の官)の**武城**(県、漢の東武城、唐の貝州)の**孫伏伽**は上表す、以為く、

「隋は其の過ちを聞くを惡むを以て天下を亡う。**陛下**は晉陽に龍飛し、遠近は響應し、未だ期年ならず而して帝位に登る。徒だ之を得る之易きを知り、隋の之を失う之難からずを知らざる也。臣は謂うに宜しく其の覆轍を^か易え、務めて下情を盡くすべし。凡そ人君の言動は、慎まざる可からず。竊に見るに**陛下**は今日即位し而して明日鶴雛を獻ずる者有り、此れ乃ち少年之事なり、豈に**聖主**の須いる所なる哉！又た、百戲散樂は、亡國(北齊・北周・隋)の淫聲なり。近ごろ太常は民間に於いて婦女の裙襦五百餘襲を借り以て妓衣に充て、五月五日の玄武門の遊戲に擬す、此れ亦た以て子孫の法と為す所に非ざる也。凡そ此くの如き類は、悉く宜しく廢罷すべし。善惡之習いは、朝夕漸染し、以て人を移し易し。**皇太子**、諸王參僚左右は、宜しく謹んで其の人を擇ぶべし。其の門風の雍睦(統は雍穆)なる能わざる有り、人と為り素より行義無く、

専ら奢靡を好み、聲色遊獵を以て事を為す者は、皆な之をして親近せ使む可からざる也。古より今に及び、骨肉乖離し、以て國を敗り家を亡ぼすに至るは、未だ左右の離間するに因り而して然らざるは有らざる也。願わくは陛下は之を慎むべし。」

上は表を省て大いに悦ぶ、下詔して褒稱し、擢んで治書侍御史と為し、帛三百匹を賜り、仍って遠近に頒示す。

■辛丑(37-10+1=28日)、内史令の延安の靖公の竇威は薨ず。將作大匠の竇抗を以て納言を兼ね、黃門侍郎の陳叔達をして(11-023p)納言に判ず。(兼と判とは正官にあらず)

【李密は宇文文化及を圧倒】

● [李密は黎陽で宇文文化及の包囲を撃退] 宇文文化及は輜重を滑台(滑州の治所)に留め、王軌を以て刑部尚書と為し、之を守ら使め、兵を引いて北に黎陽に趣く。李密の將の徐世勣は黎陽に據り、其の軍の鋒を畏れ、兵を以て西に倉城を保つ。化及は河を渡り、黎陽を保ち、兵を分けて世勣を圍む。密は步騎二萬を帥い、清淇(汲郡の衛県は古の朝歌なり。隋の開皇十六年に分けて清淇を置く。大業の初めに廢して衛県に入る。李密は蓋し故県に壁するなり)に壁し、世勣と烽火を以て相い應じ、溝を深くし壘を高くして、化及と戦わず。化及は倉城を攻める毎に、密は輒ち兵を引いて以て其の後を拵す。密は化及と水(洪水)を隔て而して語り、密は之を數めて曰く、

「卿は本は匈奴の早隸破野頭(隋書宇文述傳に本姓は破野頭、鮮卑に役属す。侯豆歸るは其の主に舌が射て宇文氏と為ると)なる耳、父兄子弟は、並びて隋の恩を受け、富貴は累世、舉朝二莫し。主上は徳を失い、死諫する能わず、反りて弑逆を行い、篡奪を規らんと欲す。諸葛瞻(諸葛亮の子、蜀滅亡時に死す)之忠誠を追わず、乃ち霍禹(霍光の子、漢の宣帝は政を親らし、禹は大逆を為さんと謀り遂に以て族滅す)之惡逆を為し、天地の容れざる所、將に何くにか之かんと欲すや！若し速かに來たりて我に歸せば、尚ほ後嗣を全くするを得る可し。」

化及は默然とし、俯視すること良久しく、瞋目して大言して曰く、

「爾と相殺の事を論ず、何ぞ書語を作すを須いん邪！」

密は從者に謂って曰く、

「化及の庸愚は此くの如し、忽ち帝王と為るを圖らんと欲す、吾は當に折杖をもて之を驅る耳！」

化及は盛んに攻具を修め以て倉城に逼り、世勣は城外に於いて深く溝を堀り以て固守し、化及は塹に阻まれ、城下に至るを得ず。世勣は塹中に於いて地道を為り、出兵して之を撃ち、化及は大敗し、其の攻具を焚く。

● [李密は皇泰主の誘いに従う] 時に密は東都と相い持ちて日久しく、又た東は化及を拒み、常に東都の其の後を議するを畏れる。蓋琮の至るを見、大いに喜び、遂に上表して降を乞い、化及を討滅して以て贖罪するを請い、獲る所の凶黨雄武の郎將(煬帝は驍果を募り、左右雄武府・雄武郎將を置き、以て之を領せしむ)の於洪建を送り、元帥府の記室參軍の李儉、上開府の徐師譽等を遣わして入見せしむ。皇泰主は命じて洪建を左掖門外に戮し、斛斯政之法(斛斯政の殺戮は182卷大業十年にあり)の如し。元文都等は密が降るを以て誠實と為し、盛んに賓館を宣仁門(東都の東城、皇城の東に在り)の東に飾る。皇泰主は儉等を引見し、儉を以て司農卿と為し、師譽を尚書右丞と為し、導從を具し、饒(鈴に似て舌無し)吹を列せ使め、館に還り、玉帛酒饌ありて、中使は相い望む。密を太尉、尚書令、東南道大行台行軍元帥、魏國公と冊拜し、先ず化及を平らげ、然る後に入朝して輔政せしむ。徐世勣を以て右武侯大將軍と為す。仍ほ下詔して密の忠款を稱し、且つ曰う、「其の用兵の機略は、一に魏公の節度を稟けるべし。」

元文都等は和解を喜び、天下定まる可しと謂い、上東門（東都城の東面の三門の北門、中は建春門、南は永通門）に於いて置酒して樂を作し、段達より已下皆な起ちて舞う。王世充は色を作して起居侍郎（起居郎は皇帝の動止の記録の起居注に因りて名と為す）の崔長文に謂って曰く、

「朝廷の官爵は、乃ち以て賊に與える、其の志は何を為さんと欲する邪！」（11-024p）

文都等も亦た世充が城を以て化及に應じんと欲するを疑い、是に由り隙有り、然るに猶ほ外に相い彌縫し、陽りて親善を為す。

●【李密は化及を撃破】秋，七月，皇泰主は大理卿の張權、鴻臚卿の崔善福を遣わして李密に書を賜いて曰く、

「今日以前、鹹な共に刷蕩（洗濯）す。使い至りて以後、彼此は懷を通じる。七政（日月五星）之重き、公の匡弼に佇つ。九伐（周官に大司馬は九伐の法を以て邦国を正すと）之利、公の指揮に委ねる。」

權等は既に至り、密は北面して詔書拜受す。既に西慮無く（密の軍は鞏洛の東に在り、都城は西に在り）、悉く精兵を以て東に化及を撃つ。密は化及の軍糧の且に盡きんとすを知り、因りて偽りて與に和す。化及は大いに喜び、其の兵食を恣にし、密が之を饋るを冀う。會々密の下に人有り罪を獲、亡げて化及に抵り、具に其の情を言い、化及は大いに怒る。其の食又た盡き、乃ち永濟渠を渡り、密と童山（隋志に汲郡衛県に有り）之下に戦い、辰より酉に達す。密は流矢の中たる所と為り、馬から墮ちて悶絶し、左右は奔散す。追兵且に至らんとし、唯だ秦叔寶は獨り之を捍衛し、密は是に由り免かるるを獲る。叔寶は復た兵を收めて之と力戦し、化及は乃ち退く。化及は汲郡に入りて軍糧を求め、又た遣使して東郡の吏民を拷掠し以て米粟を責める。王軌等は其の弊に堪えず、通事舍人（隋の内書省に十六人あり）の許敬宗を遣わして密に詣りて降を請わしむ。密は軌を以て滑州（東郡を改めて滑州と為す、白馬に治す。河南省河北道滑県の東二十里。隋の開皇三年に滑州を置く、滑台より命名）總管と為し、敬宗を以て元帥府の記室と為し、魏徵と共に文翰を掌らしむ。敬宗は、善心（江都の乱に死す）之子也。房公の蘇威は東郡に在り、衆に隨いて密に降り、密は其の隋氏の大臣なるを以て、虚心に之を禮す。威は密を見、初めより帝室の艱危を言わず、唯だ再三舞蹈し、稱す、

「圖らずも今日復た聖明を睹んとは！」

時の人は之を鄙しむ。化及は王軌の叛するを聞き、大いに懼れ、汲郡より兵を引いて以北の諸郡を取らんと欲し、其の將の陳智略は嶺南の驍果萬餘人を帥い、樊文超は江淮の排〔予贊〕を帥い、張童兒は江東の驍果數千人を帥いて、皆な密に降る。文超は、子蓋（煬帝に事えて東都を守るの功有り）之子也。化及は猶ほ衆二萬有り、北に魏縣（武陽郡に属す。時に李密は改めて魏州と為す）に趣く。密は其の為す能う無しを知り、西に鞏洛に還り、徐世勣を留めて以て之に備える。

【梁師都・薛舉は西部に割拠、唐は制せず】

●乙巳（41-40+1=2日）、宣州刺史の周超は朱粲を撃ち、之を敗る。

●丁未（43-40+1=4日）、梁師都は靈州（靈武郡を靈州と為す、甘肅省寧夏道靈武県、現・銀川市靈武市）を寇し、驃騎將軍（義師の初めて起こるや、隋の鷹揚郎將を改めて軍頭と為し、つぎて改めて驃騎將軍とす）の藺興榮は撃ちて之を破る。

突厥■●【西方の動向】突厥の闕可汗（西突厥の闕度設は會寧に拠り、隋乱れるや可汗を自称）は遣使して内附す。初め、闕可汗は李軌に附く。隋の西戎使者（煬帝の置く官）の曹瓊は甘州（西魏廢帝二年に張掖を以て甘州と為す。隋の大業中に以て張掖郡と為す。唐は復た甘州と為す）に據りて之を誘い、乃ち更に瓊に付き、之と與に軌を拒む。軌の敗る所と為り、達斗拔谷に竄れ、吐谷渾と相い表裡し、是に至りて内附し、上は厚く慰撫を加える（統は欠如）。尋いで李軌の滅す所と為る。（11-025p）

● **薛舉は李世民軍を破る** 薛舉は進みて高址（続は高壙、甘肅省涇原道寧県の南に高壙城あり）に逼り、遊兵は豳（北地郡を豳州と為す）、岐（扶風郡を岐州と為す）に至り、秦王の**世民**は溝を深くし壘を高くして與に戦わず。會々**世民**は瘡疾を得、軍事を長史、納言の**劉文靜**（納言を以て秦王の行軍長史）、**司馬の殷開山**（吏部侍郎を以て行軍司馬と為る）に委ね、且つ之を戒めて曰く、

「**薛舉**の懸軍は深く入り、食は少なく兵は疲れる、若し來たりて挑戦すれば、慎みて應じる勿れ也。吾が疾の愈えるを俟ち、君等の為に之を破らん。」

開山は退き、**文靜**に謂って曰く、

「王は公が辨ざる能わざるを慮り、故に此の言有る耳。且つ賊は王の疾有るを聞き、必ず我を輕んじる、宜しく武を曜かして以て威す。」

乃ち高址の西南に陳し、衆を待み而して備えを設けず。**舉**は師を潜めて其の後を掩い、壬子（48-40+1=9日）、淺水原（陝西省閩中道長武県、現・咸陽市長武県）に戦い、八總管は皆な敗れ、士卒の死する者は什に五六、大將軍の**慕容羅睺**、**李安遠**、**劉弘基**は皆な没し、**世民**は兵を引いて長安に還る。**舉**は遂に高址を抜き、唐兵の死者を収めて京觀を為る。**文靜**等は皆な坐して除名さる。

■乙卯（51-40+1=12日）、榆林の賊帥の**郭子和**は遣使して來降す。以て靈州總管と為す。

【東都騒乱】

● **王世充は元文都一派を誅殺して実権** **李密**は戦勝する毎に、輒ち遣使して捷ちを**皇泰主**に告げる。隋人は皆な喜び、**王世充**は獨り其の麾下に謂って曰く、

「**元文都**の輩は、刀筆の吏なる耳、吾は其の勢いを觀、必ず**李密**の擒とする所と為る。且つ吾が軍士は屢々**密**と戦い、其の父兄子弟を没すること、前後已だ多し、一旦は之が下と為れば、吾が屬は類無からん矣！」

以て其の衆を激怒せんと欲す。**文都**は之を聞き、大いに懼れ、**盧楚**等と謀り**世充**の入朝に因りて、甲を伏して之を誅さんとす。**段達**の性は庸儒にして、事（続は其事）の就らざらんことを恐れ、其の嬖の**張志**を遣わして**楚**等の謀を以て**世充**に告げる。戊午（54-40+1=15日）夜三鼓、**世充**は兵を勒して含嘉門（含嘉城に通じるを以て名付ける）を襲う。**元文都**は變を聞き、入りて**皇泰主**を奉じて乾陽殿（隋の東都宮の正殿）に御し、兵を陳じて自衛し、諸將に命じて閉門して拒み守る。將軍の**跋野綱**は兵を將いて出で、**世充**に遇い、下馬して之に降る。將軍の**費曜**、**田閻**は門外に於いて戦い、利あらず。**文都**は自ら宿衛兵を將いて玄武門を出て以て其の後を襲わんと欲し、長秋監（煬帝大業三年内侍省を改めて長秋監と為す）の**段瑜**は門鑰を求めると獲ずと稱し、稽留して遂に久し。天旦（且×）に曙けんとし、**文都**は兵を引いて復た太陽門（宮城の東門）を出て逆え戦わんと欲し、還りて乾陽殿に至り、**世充**は已に太陽門を攻めて入るを得る。**皇甫無逸**は母及び妻子を棄て、右掖門（皇城は都城の西北隅に在り、南面の三門の中を端門、右掖門・左掖門あり）を斫り、西に長安に奔る。**盧楚**は太官署（光祿寺に在り、百僚の廩署は皆皇城の内に在り）に匿れ、**世充**之黨は之を擒とし、興教門（皇宮南面の三門の左）に至り、**世充**を見、**世充**は（11-026p）亂斬して之を殺さ令む。進みて紫微の宮門を攻める。**皇泰主**は人をして紫微觀に登ら使め、問う、

「兵を稱して何をか為さんと欲するや？」

世充は下馬して謝して曰く、

「**元文都**、**盧楚**等は横しまに規圖せらる。請う**文都**を殺し、甘んじて刑典に従わん。」

段達は乃ち將軍の**黃桃樹**をして**文都**を執送せ令む。**文都**は顧みて**皇泰主**に謂って曰く、

「臣は今朝死す、陛下は夕に及ばん矣！」

皇泰主は慟哭して之を遣り、興教門を出で、亂斬すること盧楚の如し、並せて盧、元の諸子を殺す。段達は又た皇泰主の命を以て開門して世充を納れ、世充は悉く人を遣わして宿衛の者に代わらしめ、然る後に入りて皇泰主に乾陽殿に於いて見える。皇泰主は世充に謂って曰く、

「擅に相い誅殺し、曾て聞奏せず、豈に臣為る之道乎！公は其の強力を肆にし、敢えて我に及ばんと欲する邪！」

世充は拜伏し流涕し謝して曰く、

「臣は先皇の采拔を蒙り、粉骨して報ずるに非ず。文都等は禍心を苞藏し、李密を召し以て社稷を危くせんと欲す、臣が違異するを疾み、深く猜嫌を積む。臣は死を救うに迫られ、聞奏する暇あらず。若し内に不臧を懷き、陛下に違負すれば、天地日月、實に照臨する所、臣をして闔門（一家残らず）殄滅し、復た遺類無から使めん。」

詞涙俱に發す。皇泰主は以て誠と為し、引いて殿に升ら令め、與に語る事之久しく、因りて與に俱に入り皇太后（皇泰主皇泰主皇泰主の母劉良娣）に見える。世充は被發して誓いを為し、

「敢えて貳心有らず」

と稱す。乃ち世充を以て左僕射と為し、内外の諸軍事を總督せしむ。日中に及ぶ比おい、趙長文、郭文懿（二人は元、盧の党）を捕獲し、之を殺す。然る後に城を巡り、告諭するに元、盧を誅する之意を以てす。世充は含嘉城より移りて尚書省に居り、漸く黨援を結び、恣に威福を行う。兄の世暉を用いて内史令と為し、入りて禁中に居らしめ、子弟は鹹な兵馬を典り、政事を分けて十頭と為し、悉く其の黨を以て之を主らしめ、勢いは内外を震わし、趨附せざるは莫し、皇泰主は手を拱き而して已む。

● [李密は入朝中止] 李密は將に入朝せんとし、温に至り、元文都等の死するを聞き、乃ち金墉に還る。東都は大いに饑え、私錢濫惡にして、太半は雜えるに錫環を以てし、其の細かなること線の如し、米斛は錢八九萬に直す。

● [李密は恩師の徐文遠を軍師とす] 初め、李密は嘗て業を儒生の徐文遠に受ける。文遠は皇泰主の國子祭酒と為り、自ら出でて樵采し、密の軍の執る所と為る。密は文遠をして南面して坐せ令め、弟子の禮を備え、北面して之を拜す。文遠は曰く、

「老夫は既に厚禮を荷い、敢えて言を盡くさず！未だ將軍之志を審かにせず、伊、霍と為り以て絶えたるを繼ぎ傾きたるを扶けんと欲する乎？則ち老夫は遲暮なりと雖も、猶ほ願わくは力を盡しさん。若し莽（王莽）、卓（董卓）と為り、危きに乗りて利を邀めれば、則ち老夫を用いる所無し矣！」

密は頓首して曰く、

「昨朝命を奉じ、位に上公に備わる、冀わくは竭庸虚を竭くし、國難を匡濟せん、此れ密之本志也。」

文遠は曰く、

「將軍は名臣之子（李密は李寬の子。北周の將軍となり驍勇で著名）、塗を失いて此に至る、若し能く遠からず（11-027p）而して復せば（易の復卦の爻辭）、猶ほ忠義之臣と為るを失わず。」

王世充が元文都等を殺すに及び、密は復た計を文遠に問う。文遠は曰く、

「世充も亦た門人也、其の人と為りは殘忍褊隘なりて、既に此の勢いに乘じ、必ず異圖有り、將軍の前計は諧さずと為る矣。世充を破るに非ざれば、入朝す可からざる也。」

密は曰く、

「始め謂えらく先生は儒者にして、時事に達せずと、今乃ち坐して大計を決するは、何ぞ其の明なる也！」

文遠は、孝嗣（蕭氏の齊に相たり）之玄孫也。

【竇建德勢力の拡大】

■庚申(56-40+1=17日)、詔して隋氏の離宮游幸之所を並せて之を廢す。

■戊辰(4+60-40+1=25日)、黃台公の瑗を遣わして山南を安撫せしむ。

■己巳(5+60-40+1=26日)、隋の右武衛將軍の皇甫無逸を以て刑部尚書と為す。

●**【竇建德の寛容な処置で河北従う】**隋の河間郡丞の王琮は郡城を守り以て群盜を拒み、竇建德は之を攻め、歳餘にして下らず。煬帝の凶問を聞き、吏士を帥いて喪を發し、城に乗る者は皆な哭す。建德は遣使して之を吊し、琮は使者に因りて降を請い、建德は退捨し饌を具して以て之を待つ。琮の言は隋の亡ぶに及び、俯伏流涕し、建德も亦た之が為に泣く。諸將は曰く、

「琮は久しく我が軍を拒む、殺傷すること甚だ衆し、力盡き乃ち降る、請う之を烹るべし。」

建德は曰く、

「琮は、忠臣也、吾は方に之を賞し以て君に事えるを勸めん、奈何して之を殺すや！往に高雞泊に在りて盜を為し、妄りに人を殺す可きを容れる。今百姓を安じて、天下を定めんと欲す、豈に忠良を害するを得ん乎！」

乃ち軍中に徇えて曰く、

「先に王琮と怨み有り、敢えて妄動する者は、三族を夷げん！」

琮を以て瀛州（河間郡を改名。後漢には樂成國。北魏は樂成県に瀛州を立てる。直隸省津海道河間県、現・滄州市河間市）刺史と為す。是に於いて河北の郡縣は之を聞き、争いて建德に附く。

●**【竇建德は都を定め百官を置く】**是より先、建德は景城（河間郡の県、直隸省津海道交河県の東六十里、現・泊頭市交河鎮、また衡水市に景県あり）を陥とし、戸曹の河東の張玄素（県の戸曹）を執り、將に之を殺さんとし、縣民千餘人は號泣して其の死を代わらんと請い、曰く、

「戸曹は清慎無比なり、大王之を殺せば、何を以て善を勸めん！」

建德は乃ち之を釋し、以て治書侍御史と為し、固辭す。江都の敗れるに及び、復た以て黃門侍郎と為し、玄素は乃ち起つ。饒陽（河間郡に屬す、直隸省保定道饒陽県、現・衡水市饒陽県、統は津海道×）令の宋正本は、博學にして才氣有り、建德に説くに河北を定める之策を以てし、建德は引いて謀主と為す。建德は都を樂壽（河間郡に屬す、直隸省津海道獻県、現・滄州市獻県）に定め、居る所を命けて金城宮と曰い、百官を備置す。

令和6年3月28日 翻訳開始 11854文字

令和6年4月11日 翻訳終了 24823文字